13．障害者の柔道指導に関する研究動向と課題
—特に欧米の動向より—

福島大学　佐々木武人

13. The subject and trend of the research about Judo instruction for the disabled person's
— from the trend of Europe and America —

Taketo Sasaki　(Fukushima University)

Abstract

The author studied especially the research trend of Western countries, in order to examine the state of finding out the means-value and instruction of judo, the method of your guidance about a disabled person's judo in our country.

1) When judo was taught to a disabled person, having carried out the corrected contents of practice based on the principle of judo in many countries was admitted. Consequently, a possibility that mind and body can be unified better is accepted by judo. Especially, by practice of judo, ability feeling and mental feeling of each other were evoked, and it is admitted that the heart has the element released naturally.

2) In each disabled persons, an improvement of physical fitness, the possibility of adjustment of mind and body, and social-mental effect was clarified. Moreover, Judo had the possibility of solution of mental conflict and accepts the effect also in adjustment of a posture, attitude- formation, and development of an athletic ability. Therefore, Judo is clearly applied as a means of an exercise cure in Europe and America.

3)The following thing was mentioned as a subject of instruction: a) The combined use with the psychotherapy by language is important. Therefore, it is that a leader has a desirable related action by the psychotherapy of language credit to a client. b) Deepen examination of the suitable contents of instruction based on a disabled person's conditions, and the guidance-method.

It was found out by many researchers when there was an element contributed to a functional improvement of the body and the mental improvement about the heart by treatment-practice of judo from the above thing.

Ⅰ．はしがき

わが国の固有の運動文化財である柔道は内外に於いて発展し、今や世界において、オリンピッ

クの競技種目の一翼を担っている。柔道の創始者・嘉納治五郎は、柔道の目的として「体育」、「勝負」、「修心」を挙げ、それらを達成するための方法として、乱取り、試合、形の方法によるものとし、その根本原理を「精力善用」とした。今日までの柔道の発展過程で、特に「勝負」を競う、いわゆる試合の競技面が突出して普及してきたことは否めない。そのような中で、改めて柔道の教育並びに体育的価値、特に「体育」（健康福祉面などを含む）と「修心」（精神面など）の側面を強調・推進する必要があり、同時に将来的な側面として障害者の人達への療法やレクリェーショナルな手段としての柔道の必要性と在り方が考えられてくる。

嘉納は、柔道の定義を「……目的に適うように精神と身体を最も巧みに働かさなければならぬ。これを心身の最有効使用道とも使用道ともいい、何事をするにも成功への一貫した大道である。この道を柔道と称するのである。攻撃・防御を目的としてこの道を応用することを武術といい、身体を強健にし、実生活に役立たせるようにこの道を応用することを体育という。また、智を磨き徳をを養う為にこの道を応用すると、智徳の修養となり、社会に於ける万般のことに応用すると、社会生活の方法となる。」（嘉納治五郎、1931）としている。

さらに、嘉納は彼自身の柔術修業と柔道の開発の経験から、柔道は心身鍛練の優れた手段でもあるとし、柔道によって身体の健康を増進するにつれて、精神上の利益をも自覚するようになった。このことは少年の頃短気であった嘉納は、柔術の修行によって沈着となり、自制心を強め、精神も爽快を覚える等種々の効果を得たことから強調された。このように、柔術は勝負の修行として有益であるばかりではなく、心身鍛錬の上に余程の効能のある修行であることを確信し、「従来の教え方にも種々改良を加え、最早ひとつの術ではなく、ひとつの道として教えるようにした。そうしてその道に基づいて攻撃・防御の方法、身体鍛錬の方法、精神修養の方法、その他色々のことに亙って指導すべきであると信じ、云々。」（嘉納治五郎、1931；松本芳三、1975）と述べ、教育機関とも云える講道館を創設し、多くの柔道修行者を迎え入れた。さらに、嘉納は、「世の中に体育の種類は沢山あるが、柔道の体育程仕方の多様のものはない。乱取というものもあり、形というものもあり、形の中でも国民体育というようなものは、老幼男女・強弱の別なく、誰にでもできるのであるから、一生を通じて身体を強健にする方法として最も優れたものである。」（大滝忠夫、1971）と利点を説かれた。

一方、現代では将来の柔道の教育的価値を考えたときに、時宜を得て若きフランスの柔道家で、アトランタとシドニーオリンピックの柔道競技（100kg超級）の金メダリストであるDavid Douillet（2001年）がアスリートの立場から柔道に対して示唆に富んだ考えを述べた。「柔道は人と人とがコミュニケーションをとる上で非常に有効な競技である。」とし、緊張した相対関係でも思いやりを持っての柔道稽古は互いの力量感覚や心理感覚が皮膚で直接感じられて、心が自ずと解放される要素を持っている。そして柔道は「感覚で話ができる」と受け止め、自己のコントロールが必要とされるスポーツ運動であると認識している。このように柔道が精神心理面において効果的な側面があることを強調している。このことは、障害を有する人達にとっても格好のスポーツになっているようだ。従って、David Douillet（2001年）が柔道は人生に、かつ生き方としてプラスになるスポーツと捉え、柔道を心身セラピーのツール的側面をも有しているとみて、有効性があると認識されているようである。

国際柔道連盟（IJF）の教育委員会では、1999年に第1回世界柔道会議（英国のバーミンガム市）、2001年に第2回世界会議（ドイツのミュンヘン市）、そして2003年には第3回世界柔道会議（日本の大阪市）を開催し、毎回のシンポジウムで障害者の柔道指導に関するテーマが取り上げられ関心を持たれてきている。特に欧州では、柔道の価値を競技面だけでなく、教育面や福祉面で

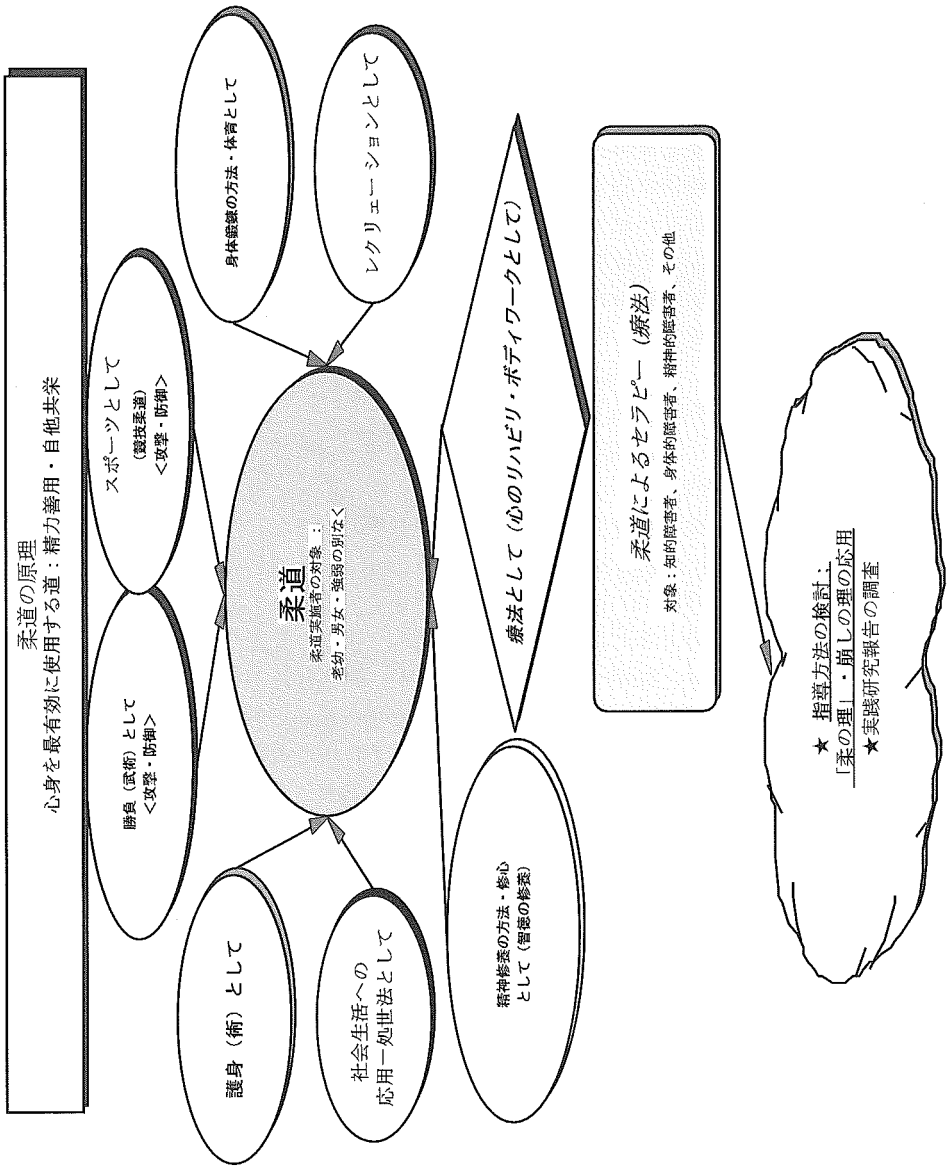

図1　柔道の手段的価値の概念について
Fig. 1. The concept of means value of Judo

さらに高め、広く普及する機運が芽生えている。それに関する学術的な研究も披瀝されている。わが国では、その点の研究が遅滞されている。欧米のこれまでの試行的な実践的研究成果より認識を深めたい。

今後の柔道を考える上で、図1に柔道本来の固有の価値と、さらに寄与できる多様な手段的価値の側面について示した。

Ⅰ－2．研究の目的

わが国では、精神障害、知的障害を持つ人達に対するスポーツ・運動療法などの福祉面の視野に焦点を当てた研究実践が余り多くみられない。

しかし、欧米では、特に武道種目の空手や柔道等が運動療法の手段として用いられ、我が国よりも先んじて精神・心理医療面のリハビリテーションとして広く応用されている。

そこで本研究は、今後の我が国での障害者における柔道指導のありかたと課題を検討することをねらいとして、欧米における障害者を対象とした柔道の療法性を適用した研究報告からその内容と柔道の関係的価値及び指導方法などの研究動向を捉えようと概観した。

Ⅱ－1．知的障害者と精神障害者について

Van, Krevelen, D. A.（1974）は、知的障害者の子どもに対して、フロスティッグのムーブメント（運動）療法に柔道を適用した効果について報告した、Davis, B. and Byrd, R. J.（1975）らは、教育可能な知能発達障害者を対象に柔道の効果について体力や心身の調整などを、それぞれ明らかにした。Gleser, J. M., Margulies, J.Y., Nyska, M., Porat, S. and Mendelberg, H.（1992）らは、盲目で精神的に知恵遅れの子ども達たちを対象に、彼らの条件に合わせて修正した柔道の指導を実施し、身体的・心理社会的な利点を確かめようと試行的な研究を試み、体力の改善が示された。

精神障害者への柔道については、Bonfranchi, R（1980）が、問題行為を持つ学生のための治療として柔道を試みている。Prieur, J. C（1983）は、柔道により精神疾患の統合作用を施すために精神医学の面から、Gleser, J；Lison, S（1986）らは、情緒的ノイローゼの青年のための治療として柔道による療法の効果について、Therme, P；Raufast, A（1987）らは、精神病の子ども達を対象に柔道練習を試み療法の効用について、Gleser, J. and Brown, P.（1988）らは、精神病的症状である葛藤・軋轢を解くための方略に柔道における原理（「柔の理」）を応用した指導を試み、柔道の効用の成果を報告している。また、May, T. W., Baumann, C.；Worms, L.；Koring, W.；Aring, R.（2001）は、重複障害およびてんかん症状を持った青年を対象に、身体の調整と姿勢の動揺について柔道トレーニングの影響の研究を試み、柔道実施グループが身体的な調整および身体動揺で改善を示したことを報告した。その改善は調整とバランスにおいて期待され、分析の結果、対照群とは対照的に柔道グループが身体的な調整および身体動揺で改善を示したが、心理的な運動機能および反応時間において柔道トレーニングには有意な効果が観察されなかったことを挙げている。Baumann, C.（1999）は、てんかん症状を持つ障害者の柔道活動への参加について、スポーツ研究者の支援で、規則的な柔道トレーニングの可能な影響を測定した。対照群を設けて縦断的な研究を実施し、多数のハンディキャップ（精神障害、てんかん）に苦しむ参加者の身体調整を調査し、柔道の実施群の訓練効力の改良が対照群より著しく大きく、柔道トレーニングは、療法的に活性化し長期的に身体調整を豊かにできることを認めた。さらに、Baumann, C., Worms, L., Korning, W., May, T., Aring, R.（1998）は、重複障害の青年達の柔道トレーニングは身体調整（コーディネーション）を改善することを明らかにし、柔道が身体調整に効果的であることを認めている。

イタリアのVisalli, S.；Sozzi, G.；Vizzardi, M.（1995）は、知的障害のある被験者に適用されたスポーツ活動としての柔道は大きな効用を実証したことを報告し、様々なタイプの精神障害のある人々が7年間の柔道教室の経験から効能が明らかにされ、成功したことを強調している。

フランスのPrieur, J. C.（1983）は、スポーツと障害者についての研究で、スポーツ協会のボランティア活動で精神障害者の柔道による「心とからだ」の統合の実験を試みた。また、Cardinal, Y.（1978）は、障害を持つ子ども達に柔道による遊び方と柔道の技能指導について報告をしている。van Hal AJ（1969）は、知的障害を有した人達への有意義な柔道についての方法を示した。ちなみに我が国では、佐々木（1995年）の「知的障害者と柔道教育」、「精神遅滞児の柔道指導について」の研究報告で、柔道の心身の調整や態度形成、運動能力の開発へ有効な側面があることを授業実践から明らかにし、我が国では数少ない研究の成果を示した。

このように、知的障害や精神的障害への柔道指導がかなり効果的な面を表していることが明らかにされている。

II－2. 視覚障害者について

視覚障害者に対する柔道の試みでは、Lignac, B.；Weil, M.（1987）らが、完全盲目者と半盲目者のための柔道について運動学的に研究した。Loetje, R.（1981）は、柔道コーチが視覚障害を持つ18人の子ども達のグループに柔道を教えた経験について報告した。彼は、視覚障害の子ども達への柔道指導で、考案した特別の練習や設備について用意し、スポーツを単に教えることだけではなく、子ども達の自信を構築し、荒れた気持を低下させる手段として指導した。その結果、顕著な傾向として障害のなかった子ども達とうまくコミュニケーションが図れ統合ができたことを挙げている。

視覚障害者の柔道においては、試合・競技の次元で競技化が著しく発展し、健常者とともに殆ど同様なルールで実施が可能であり、国際大会やオリンピックと同様な世界的大会であるパラリンピックにまで発展している。従って、彼らの競技力向上のためのコーチング方法や試合のルールと運営等については柔道の競技団体の支援を得ている現状である。1996年に国際パラリンピック委員会へ国際柔道連盟の協力により柔道試合の審判についての規定が出され1996年の「盲目のアスリートへの柔道コーチング」に基づいて、1998年に視覚障害者のための国際的な柔道トーナメントが実施された。

II－3. 身体障害者（四肢障害）について

ベルギー国において、身体障害者（四肢障害）と柔道の研究では、脳性小児麻痺の子ども達を対象に身体活動として柔道を試みた報告があり、脳性小児麻痺を持った人々が肉体的活動に参加することができる範囲、およびその活動に参加した結果の利点や効用への注目がなされている。その活動のタイプはハンディキャップの厳しさに依存し、彼らにとっての活動の練習は体育性を含んでいることを明らかにした。他の運動と同じように柔道によってバランスが改善される利点や、移動運動や調整、社会統合、自己イメージおよび空間構成に効果の可能性を有し、体力の改善と療法性を認めている。

Pelletier, C（1975）は、障害を持った幼児に対して柔道を試み、Bonfranchi, R.（1980）は、先天性四肢奇形を持った青年のための柔道について報告している。さらに、彼は行動障害のある学生のためのセラピーとして柔道を用いたことを報告している。Lev, J.（1986）は、障害者への柔道と護身術についての研究報告がある。Koo, de, A.: Haan, Alkema, de, W.らと、およびBurel, H；BuiX-

uan, G.（1989）、Gaertner, AV.（1990）、Weil, M.（1991）らは、同様に身体的障害を持つ人達への柔道指導について実践的教育方法、統合志向性、社会性の面から検討している。

2003年に大阪での国際柔道連盟主催による世界柔道会議での学術研究発表で、スペインのGarcia Garcia Jose Manuel（2003）らは、車椅子の脊髄損傷者の機能回復を目的としたリハビリテーションに、柔道を採用し、特に寝技の練習をとり上げ、その指導内容と方法並びにその効果を紹介した。欧米での柔道による療法への取り組みの積極的な一端が窺われた。

わが国では、橋本、柏崎ら（1995）が、中山（1986年）の療育に柔道を取り入れた目的と効果について実践報告をもとに、「武道で生き生き人生－事例報告」の中で「障害者への柔道による武道の可能性を探る」と題して、重度身体障害者更正施設である大阪の「わらしべ学園」（村井正直博士の指導）の取り組みについて紹介した。それは、脳性麻痺の障害児を対象に療育として、障害児・者各自の持ち味を十分に引き出しながら自らの内発性で自己改造をすすめてゆくハンガリーのペトー法を基盤に据えた日常生活全般を通じての集団指導療育を行っている。その療育方法として、柔道を取り上げ、数少ない実践の例を紹介した。その例は痙直性四肢麻痺の少年が歩行がままならなかったが、やがて受身を会得し、乱取を行うようになったことや、右片麻痺の医学生、言語障害の小学校5年生、右片麻痺の小学校1年生らが柔道を試みて、技を競い合うようになった事例を報告している。わが国では唯一の先導的なケースであると言える。

Ⅲ．まとめ

今回の欧米の障害者の柔道指導に関する研究動向より、柔道の療法としての効果と価値の研究が多く見られ、柔道の手段的価値の拡大性を追求している証左が伺われた。改めて柔道に多面的な価値が存在することが考えられ、従って図1の試合（勝負）や体育、レクリエーションなどの分野に対置した領域として位置づけられることができると云えよう。とりわけ、柔道の療法的効果の動向で明らかにされた主な点は、心の調整や体力の調整に有効であり、心理的葛藤を解決するための可能性を有し、姿勢の調整、態度形成、運動能力の開発にも効果を発揮していることが認められた。

Ⅳ．今後の課題

障害者に対する指導の方法論の留意すべき点として、基本的な接し方が考えられる。その点で、川住隆一（1994）の報告は重要な示唆を与えている。すなわち、係わりのラポート体制がよければ、障害児・者は係わり手の働きかけに対応して姿勢等を調整する動きや、活動の継続を求めるような行動、さらに、相手に身を委ねてリラックスする状態がみられたとし、係わり手も、クライアントの動きに応じて自分の働きかけを調整したり、クライアントの気持ちを読み取り、それを共有しようとする志向性がみられたと云っている。さらに相互の身体接触に基づく運動活動を通した「関係あそび」のような動作を施すことで、対人関係の向上が示されたことを上げている。このような活動を行うには、1）クライアントと係わり手との相互関係の形成を目指しているという目的を常に踏まえること。2）特定の運動プログラムを実施するのとは違い、運動活動の内容は個々のクライアントの様子や体力・体格と、係わり手の体力や体格とを考慮に入れながら工夫していくこと。3）働きかけが一方的にならないように、クライアントからの誘いあるいは継続を要求するような動きがないかどうかに留意すること。4）活動内容に応じて声の調子を変えながら、絶えず言葉をかけたり、身体を通してのやりとりを試みること、等を挙げている。

実際の柔道の練習では、「取り」と「受け」と「形」的に、約束的な動きの状況を構成して、ク

ライアントの状態に合わせて互いに心身の力を発現して実施し、体性感覚の活動や反射機能を促し、力的感覚を誘発することで心地よさが感得される。その結果が心理面に好影響を期待できると云えよう。そのために指導者のクライアントへの言葉かけは重要である。

参考文献

1) Baumann, C., Worms, L., Korning, W., May, T., Aring, R. (1998) Judo training improves body coordination in multiply handicapped adolescents ; International journal of sports medicine ALLEMAGNE 1998, t 19, supplement 1, 35th German Congress of Sports Medicine (Tubingen, 25-27 sept 1997), p S53, 1p
2) Bonfranchi, R. (1980) Judo mit dysmeliegeschaedigten Jugendlichen. (Judo for adolescents with dysmelia.), Praxis der Psychomotorik 5(2), pp.64-68.
3) Bonfranchi, R. (1980) Sport als therapeutisches Mittel fuer Verhaltensauffaellige, dargestellt am Beispiel Judo. (Sports as therapy for students with behaviour problems, using the example of judo.) Zeitschrift fuer Heilpaedagogik 31(1), pp.681-688
4) Burel, H; Bui Xuan, G. (1989) Les professeurs de judo aupres des personnes handicapees: pratiques educatives et positionnement social. (A doctorate thesis Bui Xuan : Judo instructors with handicapped persons.), E.P.S. Education physique et sport (Paris); 39 (216), mars/avril 1989, pp.76.
5) Cardinal, Y. (1978) Jouer en faisant du judo, Sport : revue belge de l'education physique, des sports et de la vie en plein air 21(2), pp.99-102.
6) David Douillet(2001)「柔道より学んだこと」雑誌「近代柔道」No. 5(May)；pp.6-8, 5
7) Davis,elberg, H. (1992) Physical and Psychosocial Benefits of Modified Judo Practice for Blind, Mentally Retarded Children: A Pilot Study. Perceptual and Motor Skill 74: pp.915-925.
8) Davis, B. and Byrd, R. J. (1975) Effects of Judo on the Educable Mentally Retarded. Journal of Sports Medicine 15: pp.337-341.
9) Dgac Productions (1980) Cerebral palsy and physical activities: DGAC Productions, Hainault, Belgium , 1 videocassette : sd., col. ; 19 min
10) Garcia Garcia Jose Manuelc Mendoza Laiz, Nuria.Garcia Munoz, Alfonso (2003) Una nueva herramienta en la rehabilitacion psico-funcional de los lesionados medulares: El Judo. International Judo Federation, 2003 World Judo Research Symposium : Oral Presentations. 9th September 2003 in OSAKA Japan.
11) Gaertner, A. (1990) Integrating physically handicapped into sport: judo : In Doll Tepper, G., Dahms, C., Doll, B., and von Selzam, H. (eds.), Adapted physical activity: an interdisciplinary approach. Proceedings of the 7th International Symposium, Berlin, June 1989, New York, Springer-Verlag, pp.177-181.
12) Gleser, J.M., Margulies, J.Y., Nyska, M., Porat, S. and Mendelberg, H. (1992) Physical and Psychosocial Benefits of Modified Judo Practice for Blind, Mentally Retarded Children: A Pilot Study. Perceptual and Motor Skill 74: pp.915-925.
13) Gleser, J. and Brown, P. (1988) Judo Principles and Practices: Applications to Conflict-Solving Strategies in Psychotherapy. American Journal of Psychotherapy 42: pp.437-447.
14) Gleser, J; Lison, S. (1986) Judo as therapy for emotionally disturbed adolescents: a pilot study. Inter-

national journal of adolescent medicine and health (London, Eng.); 2(1), Jan/Mar 1986, pp.63-72.

15) 橋本敏明,柏崎克彦（1995）「武道で生き生き人生―事例報告―障害者への柔道による武道の可能性を探る」月刊「武道」，11月号, pp.62-67.

16) 嘉納治五郎（1931）「柔道教本」堀書店，p.3, pp.6-7

17) 川住隆一（1994）「運動活動に基づく「関係あそび」を通しての重度・重複障害児と係わり手との相互交渉―その意義と方法―」国立特殊教育総合研究所紀要,第21巻，pp.51-58

18) Koo, de A; Haan Alkema, de W. (1981) Judo voor lichamelijk gehandicapte kinderen. (Judo for physically handicapped children.) ; Lichamelijke opvoeding 69(6), 1 Apr 1981, pp.204-213.

19) Lamarre BW, Nosanchuk TA. (1999) Judo-the gentle way : a replication of studies on martial arts and aggression. Percept Mot Skills, Jun, 88:3 Pt 1, pp.992-996.

20) Lev, J. (1986) Judo and self defence for the disabled, Mevasseret Zion Judo Club, Mevasseret-Zion, Israel, 1986, 244 p.

21) Ignac, B.; Weil, M. (1987) Le judo pour les aveugles et les mal-voyants. (Judo for blind and semi-blind individuals.) Cinesiologie (Paris); (112), mar/avr, pp.84-86 .

22) Loetje, R. (1981) Judo mit sehbehinderten und blinden Kindern. (Judo with children suffering from defective vision and blindness.) Praxis der Psychomotorik 6 (4), pp.108-113.

23) 松本芳三（1975）柔道のコーチング，大修館書，pp.21-22

24) 中山浩乗（1986）「療育に柔道を取り入れた目的と効果」身体障害者福祉研究会「昭和60年度研究紀要」第33号，pp.124-126.

25) 大滝忠夫著（1971年)「私の生涯と柔道」新人物往来社，pp.33-34

26) Prieur, J. C. (1983) Sport et handicapes: une experience d'integration de malades mentaux dans une association sportive exterieure a l'institution psychiatrique. (Sport and handicap : an experiment of integration of mental patients in a sports association exterieure has the psychiatric institution). Education physique et sport 182, juil/aout 1983, pp. 32-35.

27) Pelletier, C. (1975) Experience de judo avec des infants inadaptes, <Experiment of judo with infants inadaptes> Education physique et sport 131, Jan/Feb 1975, pp.73-76.

28) 佐々木武人、坂本　剛（1996）「精神遅滞児の柔道に指導に関する事例的研究」　福島大学教育実践研究紀要,第32号,pp.79-86

29) 佐々木武人（1999）「知的障害者の柔道教育について」講道館柔道科学研究会紀要，第8輯，講道館，pp.123-138

30) Therme, P; Raufast, A. (1987) L'enfant psychotique et son corps: une experience clinique de la pratique du judo avec des enfants psychotiques. (The psychotic child and motor skills. An analysis of judo exercises with psychotic children.) Revue de l'education physique (Liege, Belgique); 27(4), dec 1987, pp.9-12.

31) Van Krevelen, D. A.(1974) Judo in the movement therapy of the mentally retarded child. Results of a survey. Acta paedopsychiatrica (Basel) 40(6), 1974, pp.221-229.

32) Weil, M. (1991) Les handicapes et le judo. Dans, Barrault, D., Brondani, J.C. et Rousseau, D. (eds.), Medecine du judo, Paris, Masson, 1991, pp. 94-99.

33) Weiser, M., Kutz, I., Kutz, S.J. and Weiser, D. (1995) Psychotherapeutic Aspects of the Martial Arts. American. Journal of Psychotherapy 49: pp.1 18-127.